

くらし

針刺す「ラジオ波焼灼療法」、負担少なく

年間約9万人が罹患する乳がんの治療に新たな方法が導入された。早期の患者を対象に、乳房を切除せず、細い針の小さな電極を刺して熱エネルギーでがん細胞を壊すことで死滅させる。治療時間は5〜10分。術後は針を抜き、絆創膏を貼るだけで済み、身体的な負担も軽減される。

(大谷 恒)

治療法は、医療機器メーカー、メドトロニック社（日本法人の一つ「コウイチエーシヤパン」）の機器を利用して、ラジオ波焼灼療法（これまでは肝臓がんの治療で保険適用されていたが、昨年11月、乳がんでも適用となった）。

乳がんの腫瘍に貫通する針を乳房の腫瘍に貫通させ、A.M.ラジオに近い周波数の医療用高周波電流を通電させ、1回に3センチの範囲でがんを焼き切る。傷は約6センチほど、身体的な負担は少ない。治療の対象は、腫瘍の直径が1.5センチ以下で、腋窩リンパ節への転移がない早期の乳がん患者、20歳以上の女性に限る。

合併症として、治療の際に皮膚の熱傷（やけど）を



臨床研究を主導し（国立病院機構東京医療センター）（東京都目黒区）の木下貴之副院長。写真：早稲

乳房切らずに乳がん治療

ラジオ波焼灼療法のイメージ



乳がんを切除しない治療による傷は針穴程度で、乳房の変形も最小限。心身の負担が軽減。皮膚の熱傷の可能性。治療した部位にしこりが残る可能性。がん細胞の明らかな焼け残りがないかを確認する必要。腫瘍の直径が1.5センチ超と治療できない。

効果
合併症と腫瘍学的

※国立病院機構東京医療センター、本部長 木下貴之副院長のコメント

された」と説明する。

早期発見の割合増

厚生労働省の全国がん登録の報告によると、令和2年の罹患数は9万2153人（女性は9万1533人）。女性の割合でみると多く、特に40代以降が多い。

日本乳癌学会によれば、乳がん検診普及などに伴い、自覚症状がないまま見つかる割合が増えている。

腋窩リンパ節への転移がなく、がんの大きさが2センチ以下の早期患者にあたるステージ0とⅠの患者の比率が増加傾向にあり、現在年間5万〜6万人程度を占めるという。

乳房を切らない治療法の普及によって何がかわるのか。木下氏は「早期患者の生存率は90%以上ある。罹患して生きていく中で、例えば、乳房を失うとか、抗がん剤による脱毛などのリスクが、我慢しているのがいい」と指摘する。

「患者の我慢を減らし、日常生活に近い形で社会復帰してもいいというものがほしい」と指摘する。

つまり乳がんの治療によって転換点となる可能性がある。まずは医師の研修。ラジオ波焼灼療法は、今年1月から東京医療センターで開始。3月中旬末までに、実施できる施設は全国で20を超え、今後増える見通しだという。

まずは医師の研修

ラジオ波焼灼療法は、今年1月から東京医療センターで開始。3月中旬末までに、実施できる施設は全国で20を超え、今後増える見通しだという。

一方、日本乳癌学会は適正使用指針を定め、対象となる患者の要件のほか、実施される施設、術者の要件を規定。手術を行う医師には経験年数、経歴証明数を求め、研修の受講も必要としている。

なぜ厳しい要件を求めるのか。治療の選択に乳がん切除の有無があれば、切らない方を選ぶ患者は多い。対象となる要件に合わない人に実施しても効果はない。治療の安全性が保てないからだ。

木下氏は「乳がん治療に対する、同じ考えを持つ、安全な手技ができる仲間を増やしていくことが大事。ルールを守って使っていくが優先だ」と語る。

この直径が1.5センチをわずかに超える患者に対し、医師が治療はできないと告げられた場合も出てくる。木下氏は「まだその施設、術者にはしっかりした治療面を持ってもらう必要がある」と話している。

つまり乳がんの治療によって転換点となる可能性がある。まずは医師の研修。ラジオ波焼灼療法は、今年1月から東京医療センターで開始。3月中旬末までに、実施できる施設は全国で20を超え、今後増える見通しだという。